全文

　織姫はきっと幸せ者だ。夜の河原で一人思う。天の川に阻まれようとも再会は約束されているのだから。
　星々を映す目の前の川に、天の川ほどの雄大さはない。しかし私は、この川の深さをよく知っている。私たちを別つ、再会も叶わぬ隔たりだ。
　音を立てるのは風に揺れる柳だけ。私は川面を見つめ続ける。
　今日はケンジ君の13回目の命日だった。あの日もよく晴れた暑い日だった。当時私は幼稚園児で、いつものようにこの川へ遊びに出かけた。私とケンジ君と、彼のお兄さんの三人で、空が赤くなるまで水遊びに興じていたのだ。
　思いがけず強い風が吹いた。抑える間もなく私の帽子は飛ばされて、岸から少し離れた水面に落ちた。それは本当に少しの距離で、大人なら一足で取りに行けるくらいのものだったと思う。だからケンジ君は何気なく川に入って行った。そして、事故が起きたのだ。
　激流だったわけでもない。しかし子供一人をさらうには過ぎた流れだった。何の警戒もなく足を滑らせたケンジ君をこの川は呑みこんでいった。お兄さんも助けに入ったけれど、救い出すことはできなかった。私はと言えば、何もできず見ていただけ。偶然通りかかった大人に泣きつくことしかできなかった。
　これが私にとって最初の七夕の思い出だ。もうケンジ君の声も顔も薄れてしまったけど、到底拭い去ることはできない思い出である。
「大丈夫よ。ケンちゃんはね、お星さまになったの――」
　ケンジ君のお母さんは、泣きながらこんなことを言った。何もできなかった私を、誰も責めなかった。私の不注意が招いた事故だったのに。私が彼を殺したも同然なのに――。
　ほどなくして、ケンジ君の一家は町を出て行った。それが13年前の顛末である。
　あれから10年以上経ったところで、私の傷は癒えない。いくら再会を望んでも、二度と叶うべくもない。そんなことはわかっているのに、こうして毎年、この川へ足を運んでしまうのだ。
　亡くなった彼のことばかり考えていると、俄かに柳のざわめきが強まった。化けて出るなら今だろうか。不謹慎な妄想がよぎる。
「よう、久しぶり」
　突然横合いから声をかけられ、私は体を強張らせた。無人だった河原に、いつの間にか一人の男性が立っていた。こちらを見ながら微笑んでいる。
「お久しぶりです、お兄さん」
　一年ぶりに見る姿は、思っていた通りまた少し大人びて見えた。成人も近い男性なのだから当然かもしれないけど。彼も事件後に引っ越してしまったため、滅多に会うことはできない。この日だけが一年に一度の再会の日だ。
「やっぱり、今年も来てくれたんだな」
　静かな面持ちでお兄さんは言った。彼もまた、一度として私を責めたことはない。それどころか、ケンジ君を助けられなかった自分にこそ罪を感じている節があった。
「私はこれからだって来ます。それくらいしか、できることもないから……」
　自然と私の口調も弱くなる。それを見たお兄さんは複雑そうな顔をした。
「……実はそのことで、一つ話がある」
　改まってお兄さんは言った。言い出しにくそうでいて、その目は何事か決意している。気付け

ば川べりの柳も静まり返っていた。
「こうして会うのもこれで終わりにしよう」
　お兄さんの言葉は、まったく予期しないものだった。理由も何も分かったものではない。しかし、星明りにもはっきりとわかる苦悩の表情が、生半可な言葉でないことを物語っている。
「今年で高校も卒業するんだったろう？　そろそろ、こんなことをしている余裕もなくなってくるんじゃないかな。それに君はもう、昔のことにそこまでこだわる必要もないんじゃないかと、俺は思う」
　ゆっくりと、言葉を選びながらお兄さんは言葉をつなぐ。しかし私にとっては納得できる提案でもなかった。
「どうしてそんなことを言うんですか。私は忘れられない。忘れちゃいけない。だってあの事故は――」
　反論しかけた私を遮ってお兄さんが問う。思わず押し黙ってしまうほどの、真剣な眼差しだった。
「会いたいんだろう、ケンジに。そして何か言いたいはずだ。違うか？」
　その通りだ。私は彼に謝らなければいけない。そのために毎年ここで、ケンジ君を想い続けてきた。それくらいしか私にできることはなかったし、それが私のしなければならないことでもあったからだ。
「君は昔、俺に言ったことがあったね。ごめんなさいって。俺が言ったことは覚えてる？」
　あれは確か、５、６年前の今日だった。私はお兄さんに改めて謝罪したのだ。でもお兄さんの返事は私の予想を裏切っていた。「もう良いんだ。できればあのことは忘れて、普通にやって欲しい、あいつも多分、そう思ってるだろうから……」そんなことを言ったのだ。それでもこの人のことだ、どうせ私に遠慮しての言葉だろうから、私は今でもこうして会いに来ている。
「覚えてます。でもどうしてそんなことが言えるんですか？　あの事故は私のせいだってお兄さんも分かってるんでしょう。私はケンジ君に何もしてあげられないじゃないですか」
　お兄さんは静かに首を振った。
「君がケンジのことを忘れないでいてくれるのは嬉しい。でもね、それに囚われ続けて欲しいなんて誰も思ってないよ。あいつだってそうだ。このまま君が一生不幸せなままでいるとしたら、あいつは悲しむだろうね」
「どうしてお兄さんにそんなことが分かるんですか」
　私はつい感情的に叫んだ。ケンジ君は死んだのだ、13年前のあの日に。それをどうしてお兄さんが代弁できるというのか。お兄さんが言いたいこともわかる。あの事故の発端は私の不注意であり、助けられなかったのはお兄さんで、子供だけを川にやった大人たちにも責任はある。私がいつまでも罪悪感に立ち止まっているのはおかしいと、そう言いたいのだろう。それでも、ケンジ君は死んだのだ。いや、ケンジ君だけではなく――
「わかっているはずだ。俺とケンジは一緒だから」
　悲しそうな目でお兄さんは言った。そう、私にもわかっている。でもこの日だけは、一年の内この日だけは目を背けて、ケンジ君だけを想っていたのだ。それが、私たちにとっての７月７日であるはずだった。
「あの日死んだのは、俺も一緒だから……」
　幻がほどけた気がした。もはや逃避を許してはくれないようだ。ケンジ君が溺れた直後、お兄さんは助けに入った。しかし、溺れた子供を子供一人で助けられるわけもなかったのだ。本当はあの日、お兄さんはケンジ君を助けようとし、自らも溺死してしまっていたのだ。

「私は……お兄さんにだって謝らないといけないのに……」
　抑え込んでいた涙が溢れそうになる。拳を握って耐えてみても、川面の星は滲んでしまう。
「悪いのは私だった。誰も私が悪いなんて言わなかったけど、でも悪いのは私だった。お兄さんにも会えなくなったら、私は誰に謝ったらいいんですか？」
　会いたかった。それは私の弱さの表れだとも思う。当事者はいなくなった町で、誰も私を責めはしない。ならば私の罪はどこで償えばいいのか。だからこそ一年に一度でも会えるなら会って謝りたかったのだ。
　お兄さんは困ったように笑いながら、私の涙を拭った。
「君が罪悪感を持つのは仕方ないかもしれない。だったら代わりに、俺が君を罰する。それでどう？」
　真っすぐ私を見つめながら、お兄さんはそんなことを提案した。私が聞き返すより早く、お兄さんは口を開く。反論の余地もなかった。
「笑っていろ。俺たちのことを忘れなくても良い。その代わり、笑って生きる道を見つけろ。それが罰だ。難しいか？」
　難しい。何よりも難しいに決まっている。もし道連れに死ぬことを求められたなら、私は命だって差し出すだろう。しかし私には、この川を越えることも許されないのだ。
「何十年かかるかわかりません。そんなに待たせても良いんですか？」
　私は涙にかすれる声で問う。真っすぐ見つめ返すこともできなかった。
「間違っても死ぬんじゃない。俺たちはいつまでだって待ってるから」
　お兄さんは心を読んだように釘をさす。言葉を発するに連れて、星明りの下で、次第にその影を薄れさせていく。
「俺もケンジも、君のことが大好きだからさ」
　そして、お兄さんの気配は霞のように溶けていった。涙を拭って顔をあげても、そこには誰もいなかった。
　あとに残されたのは私一人。再び静寂が降りた河原に一人佇む。毎年会っていたあの人は、私の生んだ幻だったのか、それとも幽霊だったのか、それすらも私には分からない。どちらにしても、もう会うことはないという予感があった。
　背負うことはないと言った。幸せになれと言った。彼らなら言いそうなことだ。しかし本当にそれで良いのだろうか？　あの人がお兄さんだった保証はない。私はまた、罪を重ねようとしているのではないのか？
　しかしきっと、最初の罪は私にも在り、私でないところにも在るのだろう。先の会話が免罪を求める妄想だとしても、交わされた言葉は私の真実だ。だから私は、前を向かなければならない。
　空を仰いだ私の目に、滲んだ天の川が流れ込む。叶うものならもう一度会いたい——その思いは依然としてある。大好きな彼らにもう一度会えるなら、私はこれからを生き抜いて見せよう。せめてそれが、私にできる贖罪と信じて。
　それでもなお、願わずにはいられない。今日は約束された再会の夜。一年に一度だけでもいい、私も川を渡れたら。いっそこの身も星であったなら、彼らとまた笑い合えるのだろうか。